

2部

フィールド フィールド
現場から現場へ

私の国家試験受験体験記

OB MESSAGE

通信教育部社会福祉学科卒業生 井上 華子

30代での大学編入

私はある縁がきっかけで、30代に入って初めて福祉関係の仕事に従事することになりました。もともと語学系の学校を卒業し、福祉とは縁もゆかりもない仕事に就いていたので、人生というものはどう転ぶかわからないものだと感じます。市が運営する障がいのある人の就労支援機関に入職し、初めて“発達障がい”というものがあることを知り、世の中には多くの障がいのある人が企業就労をしているということを知りました。

ベテラン社員に現場で教わりながら、体験的に仕事を覚えていくことになりましたが、1年を経過したある時期から、経験だけではカバーできない“土台”の部分の欠落を意識するようになりました。福祉の仕事に携わるものとしての基本的な姿勢、立ち位置について、学びの場や機会を得ることの必要性を強く感じ、働きながら学ぶことができる東北福祉大学通信教育部に編入することを決意しました。

レポートとの格闘の日々

編入のタイミングや履修登録が4月以降だったので、初めてのスクーリング受講は初夏を過ぎた頃になってしまいました。その間、仕事に忙殺され、レポートは締め切りぎりぎりでの提出が続き、内容も今思えば何を言いたいかかわからない読みにくいレポートであったと思います。何より驚いたのが、自分の記憶力や集中力の衰えでした。1日前に読んだテキストの内容が全く頭に残っていない、数ページ読むと睡魔に襲われる、一冊のテ

キストを読み切るのに恐ろしく時間がかかるなど、加齢による変化に直面しました。

10代の頃はあまり感じられなかった“学ぶ楽しさ”を初めて実感する日々ではありましたが、常に時間との戦いが続いていました。進級が危うくなった3年次の12月には、それをカバーするため、初めて仙台へ泊まりでスクーリング受講に出かけたりもしました。

長かった実習体験

4年次、相変わらず綱渡りのような在宅学習の日々を経て、7～8月に仕事を休職し、生活介護施設にて実習を行なうことになりました。同じ障がい福祉でも、勤務先の就労支援の対象者よりも障がい程度が重い利用者と対峙したことで、自分の障がい観があまりにも限定的であったことを痛感しました。実習先は、他施設で入所を断られた対象者を受け入れており、いきなり首を絞められたり羽交い絞めにされたりするなど、日常では経験のないことが続きました。

一日一日の疲労が濃く、週末の帰校指導も含め、大学生活のハイライトとも言える体力勝負の実習体験でしたが、職員の方々のお話を伺うにつれ、他害行為の奥にある対象者の気持ちや感情について、自分の主観・価値観で解釈するのではなく、自分から歩み寄って彼らの想いを理解することの大切さを少しずつ体感として学ぶことができました。この時の経験は、仕事で難しい局面に向き合った際に、思い返し立ち返る原点として、今でも自分の中に深く刻まれています。

そして…国家試験への道のり

レポートとの格闘だけで実習を迎え、実習が終わってからも事後課題レ

ポートの作成に時間を費やされたため、国家試験の問題がどういったものなのかをきちんと確認できたのは、9月下旬になってのことでした。レポートを真面目にこつこつ仕上げてきたことが、問題の正答につながるわけではない、と理解したのも同時期でした。10月に入り、初めて試験勉強を始めたのですから、他学生より遥かに遅れをとっていたことは間違いなかったと思います。「負け戦となるのかもしれない…」と、自信を喪失した状態からのスタートではありましたが、残り4ヶ月、できることはやりきって試験に臨もう、後悔のないように最善を尽くそうと思い、10月から試験対策の勉強を開始しました。私は短大卒のため、受験勉強をするということが人生で初めてであったこともあり、どう学習を進めたらよいか、本当に前後左右もわからない状態からのスタートでした。実際に受験勉強が軌道に乗り始めたのは11月を過ぎてからのことでした。

私の学習方法

私は仕事をもっていたため、すべての時間とエネルギーを受験勉強に注ぐことができる環境にはありませんでした。ただ、今思えば、その制限のある環境が、より効率的な学習への工夫につながり、頑張り過ぎて1月の大切な時期にバーンアウトする、という最悪の事態を防ぐことに有効に働いたような気がします。1～2時間、時には30分といった細切れの時間の勉強を積み重ねることで、少しずつではありましたが前に進んでいる、という実感が持て、モチベーションを維持することもできました。前回の検出時間に覚えた内容を復習することからスタートし、集中力が持続する時間で目いっぱい詰め込み、次の学習時間にその内容を復習して知識の定着を図る、という方法が、30代の頭脳労働のペースに合っていたのかもしれない。

受験対策で一番役に立たった教材は、東北福祉大学通信教育部の「特

講・社会福祉学5」でした。初回の模擬小テストは散々な結果でしたが、送られてきた「解答・解説冊子」を正答の確認に使用するだけでなく、それ以外の文章のどこの部分が間違っているのか、一つ一つネットで検索して調べ、余白に色ペンで細かく書き込んでいきました。キーワードとなる福祉用語、法律、年号なども余白に書き込み、検索中、関連した他の重要キーワードを見つけたら、それも書き込んでいきました。その際に工夫したのは、11月は紫色、12月は紺色、1月は赤色というように、書き込むペンを色分けすることです。「解答・解説冊子」は、初め紫色の文字でびっしり埋まり、翌月になってもまだ覚えていない部分はさらに紺色の文字で書き足されていくというように、どこがまだ覚え切れていないか、色でわかるようにしました。色で書かれた部分が頭に入るよう、覚えるまで何度も読み返すことで、記憶の定着を図りました。

通勤の電車の中では、社会福祉士養成校の教員による試験対策の個人ブログの問題を解き、帰宅したらその問題部分をプリントアウトし、上述のようにキーワードをネット検索して、余白に色ペンでその詳細な情報を書き込んでいきました。個人的には、“読む”だけより、“書く”方が頭に入りやすいと感じました。

12月下旬になって、遅ればせながら市販の過去問題集（5年分収録）を購入し、実際の試験時間で問題を解いてみて、採点后、解説冊子の余白に、頭に入っていない部分を同様に色ペンで書き込んでいきました。

試験合格、そして今

国家試験の行われる1月に入ってからは、とにかく体調管理に留意しました。一番寒い時期、慣れない頭脳労働をして体力を奪われているのは間違いないと感じたため、栄養のある食事を摂り、睡眠時間もきちんと確保しました。睡眠をとらないと、せっかく覚えたことも頭に定着しないよう

な気がしました。

試験を終えた日の解放感は忘れられません。それまで重い学習セットを持ち込んで追い詰められた気持ちで利用していたカフェチェーン店で、コーヒーをじっくり味わいながら、何も考えずにひたすらポーっとできる自由を噛み締めました。そして、約2ヵ月後の合格発表の日、パソコンの画面に自分の受験番号を見つけ、晴れて社会福祉士の資格を取得することができました。

資格取得をした今、仕事が楽になったわけでもなく、むしろ“名ばかり”にならないよう、プレッシャーを感じるようになりました。正直、様々な福祉課題との格闘の日々が続いています。

ただ、2年間の大学での学習の中で、自分の仕事における“指針”のようなものが形成された実感はあります。また、その“指針”を、時に疑う視点も芽生えました。

何が正解かわからない支援活動の中で、主人公はクライアントであるという点はぶれのないようにして、クライアントの最善を、クライアントとの協働作業で見出し、実現を図る。その作業に終わりはありません。大学に編入して一番良かったことは、自分がいかに支援者として“まだまだ”かということを知ることができたことです。そして、学びの日々はこれからもずっと続いていくのだと思っています。